



東北大学大学院国際文化研究科

同窓会会報

第18号



編集・発行 東北大学大学院国際文化研究科同窓会事務局 発行日：2020年3月25日

〒980-8576 仙台市青葉区川内4-1 TEL (022) 795-7556 FAX (022) 795-7583 E-MAIL <int-dosokai@grp.tohoku.ac.jp>

「東北大学ビジョン2030」について

高橋 大厚

(国際文化研究科同窓会会長・言語科学研究講座教授)

東北大学は2018年11月に「東北大学ビジョン2030」を発表しました。これは、2030年を見据えて東北大学が取り組んでいくべき挑戦を取りまとめたものです。ご興味のある方は、以下のサイトに掲載されていますのでお時間のあるときにご覧いただきたいと思います。

<https://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/vision/01/vision002030/>

その中で教育に関わる主要施策として「あらゆる境界を越え、創造的で活力ある研究者・高度専門人材を育成する大学院教育の展開」が挙げられています。本研究科はもとより、国際性・学際性を教育と研究におけるモットーとしてきたところではありますが、なお一層、領域の「境界」を越えた活動を志向していきたいと考えます。そのような取り組みの1つの例として「グローバルガバナンスと持続可能な開発」プログラムを紹介したいと思います。

これは、本研究科2つ目の国際コース、すなわち、英語を教授言語とし、10月に学生を受け入れるプログラムとして2019年4月に開始しました。4月に始まったと書きましたが、このプログラムは4月と10月の2つの時期に新入生を受け入れることにしています。国際環境資源政策論講座、国際政治経済論講座、多文化共生論講座、そしてアジア・アフリカ研究講座の4講座から教員が参加しています。グローバルガバナンスと持続可能な開発という、今日の世界が直面する2つの課題に取り組む能力を持つ学生の育成を目的としています。既存の思考様式にとらわれず、学際的な知識を駆使して新しい分析的枠組みを構築する能力が求められます。会員の皆様もニュースなどで耳にしたことがあるのではないかと思います。2015年の国連サミットで定められた持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals (SDGs)）の達成に貢献する人材を養成することも視野に入っています。SDGsには17の目標が謳われていますが、そのいずれも1つの領域を見るだけ

では達成できないものです。まさに、「領域を越え、創造的で活力」のある人材が求められます。

「東北大学ビジョン2030」には、私たちの同窓会により関係のある施策もあります。39番目の施策に、「校友ネットワークを核とした活力ある東北大学コミュニティの形成」が挙げられています。そこでは以下のように述べられています。

卒業生や在校生、その家族等の校友を対象に、本学の多様な取組についての積極的な情報発信、本学の魅力を共感できる場としてのイベントへの招待、本学施設の優先的提供など各種サービスの拡大などを通して、校友の愛校心醸成と大学の求心力向上を図ります。また、全学的校友会である「萩友会」をはじめとする校友ネットワークを核として、社会とのつながりを強化し、本学への支持・支援の輪を拡大します。

同窓会組織を重要視し、より充実させていこうという姿勢が読み取れます。東北大学のウェブサイト・トップページにある「同窓生の方へ」をクリックすると、同窓生向けの情報サイトに移動します。そこには、例えば「東北大学萩友会」へのリンクがあります（萩友会とは本学の同窓会の名称です）。「東北大学萩友会」サイトには、同窓生向けの様々な情報が掲載されています。まだご覧になったことがない方にはぜひ一度訪れてみることをお勧めします。（萩友会にはマスコットキャラクターの「シュウ」と「ユウ」がいることを皆さんはご存知でしたか？）

話を本研究科に戻しますと、私たちもこの同窓会組織を充実化させていくことを検討しております。2019年度から計画していることに、国外の同窓生ネットワークの構築があります。本会の世話役の教員を中心に、まず手始めに本研究科修了生が比較的多い中国とタイにネットワークを作ることを目指しております。同窓生の連絡先を収集し、国際文化研究科の中国やタイに関連した活動の情報発信や、ゆくゆくは会員同士の情報交換の場となることを構想しています。

国際文化研究科は、例えば中国・天津市にあります南開大学とほぼ定期的に学術交流フォーラムを開催しております。2019年度は東北大学が会場でしたが、次回は南開大学で開催する予定です。また、本年2月にはタイのタマサート大学にて共催シンポジウムを行いました。将来このような機会がある場合には、それぞれの同窓会ネットワークを通じて情報を周知し、近くにお住いであったり、ご都

合のつく同窓生の方々にお集まりいただき、「ミニ同窓会」的なものを企画することも考えられます。

このような活動が、会員の皆様の人的ネットワーク形成の一助になり、さらには国際文化研究科と社会との繋がりを強くする、そのようなものになることを願っております。会員の皆様には、同窓会ネットワークの構築と維持にご理解とご協力をいただきますようお願い申し上げます。

末筆になりましたが、この文章を書いている時点（2020年2月下旬）で日本国内を含む世界の各地で新型コロナウイルスへの感染の拡大が報じられています。会員の皆様のご健康をお祈りし、世界がこの災禍からいち早く回復することを願ってやみません。

第18回同窓会総会のご案内

第18回同窓会総会を次のとおり開催します。ご参加くださいますようお願い申し上げます。

日時：2020年3月11日（水）16時30分～

場所：国際文化研究科1階 会議室

国際文化研究科同窓会事務局

第17回総会と講演会の報告

第17回総会を2019年3月27日（水）にマルチメディア教育研究棟6階大ホールにて開催しました。総会に先立ち、斎藤珠代氏による講演会を開催しました。

講演会要旨

言語学と私～これまでを振り返って～

斎藤珠代 東北大学等非常勤講師

（言語コミュニケーション論講座博士課程後期3年の課程修了）

私は2014年9月に国際文化研究科の博士課程を修了しました。在籍した5年半を振り返ると、とても実りの多い時間だったと感じます。同窓会講演会では、これまでの歩みを振り返ったお話を主にさせていただきました。

国際文化研究科では言語学を専攻しましたが、学部時代は一橋大学で社会学を学んでいました。振り返ってみると、悩み多き時代だったと思います。当時の一橋大学は9割が男子学生で、社会に出ると男性社会の中で、いばらの道を進まなければならないということが早くも実感として迫ってきました。体力でも劣る女性として、どういう風に男性社会にかかわるべきかわからず、ビジネスの世界に出ることに大きなためらいを感じていました。同時に、専攻の

社会学の中で何を学びたいのかもなかなかはっきりせず、手あたり次第、本を読んでいた毎日でした。そんな中でソシュールの思想に出会ったことは、私にとって大きな出来事だったと思います。自分の関心が十分に定まらないまま、ソシュールの言語学に後ろ髪をひかれながら一度卒業し、英語を使う仕事につきました。そんな中で言語学者である主人と出会い、結婚しましたが、主人から大学院で学び直すことを勧められ、国際文化研究科へ入学する運びとなりました。改めて言語学を専攻し、自分より若い学生に囲まれて、アカデミックな世界にいられることは大きな喜びでした。学位をとるのは大変でしたが、振り返ってみると、指導教官の小野尚之先生をはじめとする先生方や、共に学んだ学生の皆さんに感謝の言葉しかありません。

博士課程在学中から、ご縁があり東北学院大学で英語の非常勤講師を始めました。1,2年生に一般英語を教える仕事です。博士論文執筆との二足のわらじの生活は忙しくはありましたが、英語教育という新しい世界で様々な学びがありました。博士課程修了後は講座の先生のご紹介で東北学院大学でも非常勤講師を勤めさせていただいています。2020年度からは宮城学院女子大学でも授業をすることとなりました。大学によって教育方針や、求められることも異なるので、学校や学生のニーズに応えながら、学生が英語を好きになるようにと願いつつ勤めています。

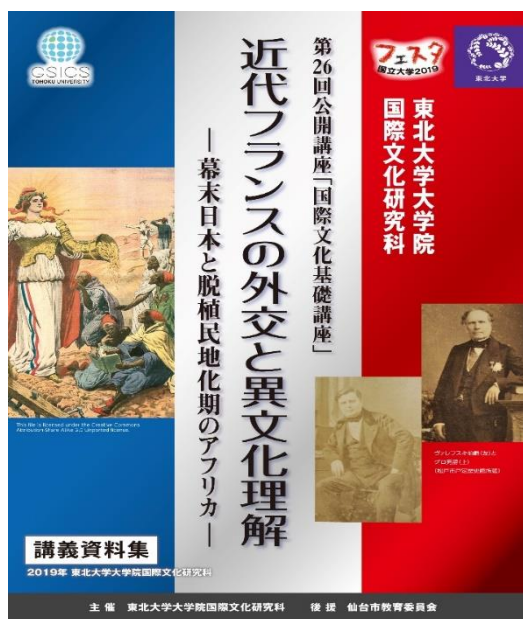
言語学の中で、私は意味論を専門としました。言語類型論で博士の学位を取得した後は、主に Wierzbicka が展開している意味論を枠組みとして研究を進めています。Wierzbicka は世界中の言語の多様性ととともに普遍性に着目し、文化に特有の語を普遍言語で分析する試みを行っています。たとえば英語の lie は悪意をもって他人を欺くという非常に悪い含意を持ち、それはアングロサクソンの文化独特だと指摘しています。この Wierzbicka の観点からスタートし、博士課程修了後最初の研究として、日本語の「嘘」と英語の"lie"の比較研究を行いました。日本語の嘘にはもっと軽い、言い間違いのような意味も含まれると予想されたからです。手法は文学作品の日本語版と英語訳で対応する箇所を拾い出し、日本語で「嘘」と表現されている箇所が英語でどう訳されているか比較するパラレルコーパスという手法です。その結果、予測した「言い間違い」以外にも興味深い例が見つかりました。その一つが、発話を伴わない「嘘」です。たとえば、『人間失格』の中で「（弁当箱に一人3粒ご飯粒を残すと、それを集めたら米俵何俵分にもなるという説教に対して）しかし、それこそ「科学の嘘」「統計の嘘」「数学の嘘」で、三粒のごはんは集められるものでなく、...」という箇所があります。これはドナルド・キーン氏の翻訳では ghost of science となっており、lie とは訳出されていませんでした。また、『地獄変』には「何しろ娘の着る物とか、髪飾とかの事と申しますと、どこの御寺の勧進にも喜捨をした事のないあの男が、金銭には更に惜し気もなく、整へてやると云ふのでございますから、嘘のやうな気が致すではございませんか」という記述があります。これは英訳では incredible となっており、やはり lie ではありません。『こころ』には「自分で病気に罹っているが、気が付かないで平気であるのがあの病の特色です。私の知ったある士官は、とうとうそれでやられたが、全く嘘のような死に方をしたんですよ。」という表現があり、英訳ではまったくこの嘘の箇所に関して

は訳出なしです。以上の3例は、一人の人間が他の人間を言葉によって欺く、という lie の構図はなく、一人の人間が存在するだけで十分であり、独白的な嘘といえます。日本語はモノローグの側面を持つという研究もあり、日本語らしさ、英語らしさについても考えさせられる研究となりました。

研究と教育で充実した日々を過ごしていますが、今までを振り返ると多くの人との縁があり、ここまで運んできてもらったような気がしています。修了生の皆様も、自分の興味を追求しながら、外の世界にも心を開いて大きく羽ばたいていてもらいたい、と願っています。

第26回国際文化基礎講座の報告

第26回国際文化基礎講座（令和元年11月）では『近代フランスの外交と異文化理解—幕末日本と脱植民地化期のアフリカ—』と題して、本研究科の2教員が日頃の研究の一端を披露されました。ここにその講演概要をご紹介します。



フランス外交と幕末日本

—フランス外交官たちのみた「日出ずる国

L'Empire du Soleil-Levant—

野村啓介（ヨーロッパ・アメリカ研究講座教授）

はじめに

フランスはアヘン戦争後に極東進出を本格化したのちに、1858年10月に日本と修好通商条約（安政の五カ国条

約）を締結して外交関係を樹立しました。現地派遣の外交官たちは、とりわけ外交関係を開拓、維持すべき初期局面では、直接的に未知の異文化と対峙し、職務を全うするために格闘していたことでしょう。本講座では、そうした外交官たちが日本をどのように観察したのかという問題を中心にお話しました。

フランス外交と日本

日本の開国史といえば、まさきにペリー来航を思いだす向きも少なくないことでしょう。英米蘭露とともに、フランスもまた日本と条約を締結したことが顧みられることは稀です。しかし、イギリスとならぶ当時のヨーロッパ列強として、フランスの存在を無視することはできません。イギリスが1840年からアヘン戦争によって中国進出の突破口を開くと、フランスも一気に中国に進出し、並行してのちのインドシナ植民地へも影響力を拡大しました。この過程で日本へと目を向けるわけですが、カトリック教会もこの地域への布教に関心をもち、日本にむかいました。フランス外交は、他の欧米列強に遅れをとるべきでないとする自国の「威信」を重視して、日本への進出にも積極的に参画したのです。

ところで、後述の外交代表ロッシュは、日本が「アジアのフランス」（1866年11月3日外相宛報告書）であると発言したことがあります。この表現は、フランス外務省内で作成された1862年4月15日付の文書にすでに見られますが、それは同年4月にパリ滞在了幕府の竹内使節団と接触したフランス政府が抱いた親近感の表明でした。こうしたフランス政府の見方に、現地の外交代表から本国政府に伝達される報告も寄与したことは間違いありません。

日本にやってきたフランス外交官

まず、日本との条約交渉を任されたのが外交代表グロ男爵です。彼は、本国政府から、対中国とは対照的に、基本的に慎重な外交姿勢のもと日本と良好な関係を志向するよう指令をうけていました。来日した代表团は、日本に「聖界皇帝 Empereur spirituel」と「俗界皇帝 Empereur temporel」（「精神的皇帝」・「世俗的皇帝」との訳しわけもある）がいることに興味をもったようです。前者は「宗教的首長」としての「ミカド」であるのに対し、後者は「タイクン」と呼ばれる「裁きをおこなう皇帝」であり、「ショウグン」と呼ばれる「戦士としての皇帝」でもあるとみなされました。日本人に関しては、「優秀な人種」とであると述べ賞賛しており、「極東のなかで日本がもっとも文明化された国民」と考えました。



条約にもとづき 1859 年夏に来日した外交代表が、デュシェヌ・ド・ベルクールです。彼は、グロ代表の見方を少しだけ深めて、日本を二人の「皇帝」が並びたつ「純粹に封建的」な国家であるとみます。国家主権は聖界皇帝（天皇）と俗界皇帝（将軍）の両人格に分有されており、両者あわせてあたかもひとつの「主権」の外観をもつとみる二元論的解釈が示されました。その対日政策は、たとえば 1864 年の下関砲撃にみられるように、一般的に強硬な態度によって特徴づけられますが、中国との比較で日本の開国を前向きに評価してもしました。

次に、1864 年夏に赴任したロッシュによれば、「ミカド」とは「日本唯一の正統君主」であって、「聖界の君主 *Souverain spirituel*」でもあり、それに対して徳川将軍は、「帝国の軍最高司令官」であり、かつ「事実上の君主」として天皇の代理人をつとめるとみました。このようにロッシュは一元的な日本国制の図式を提示して、聖俗の対によって理解するベルクールの二元論を拒絶し、将軍をあくまで天皇の下位権力であると考えたのです。当初は強硬な対日政策を志向していましたが、1865 年 1 月には「われわれの国民性と日本のそれにみられる一定の類似性」に気づき、急速に親近感を増していったようです。日本人の誇り高い点や陽気な気質などを「他国民とは異なる性格」とみて感銘をうけたのです。この延長線上にこそ、既述の「アジアのフランス」という表現が位置するといえます。



おわりに

この日仏国交の最初の約 10 年間は、フランス外交代表が日本理解を深めようとする絶え間ない努力の 10 年間でもありました。彼らが、本国政府の好意的態度形成に不可欠の貢献をなしたことは疑いなく、このような忘れられた歴史であったとしても、けっして軽視すべきではないでしょう。

アンケートによれば、本講座は意外にも好評でした。幕末の日仏関係などは受講者にとってマイナーな話題ですし、大した興味をひくことはないだろうと高を括っていたからです。しかし、「フランスの日本に対する親近感が幕末までさかのぼることができる」とわかって勉強になった」、「幕末の開国史がかえって新鮮に映った」などの感想をみて、さすがはお金を払ってまで出席する受講生だ、などと変に感心してしまいました。質疑では、対日外交における外交主体、フランス外交の「威信」とは何か、などにわかには答えづらい質問もありましたが、それだけ熱心に筆者の話に傾注してもらえたということです。ですから、有意義な時間になったことは間違いありません。

フランス植民地帝国の変容と植民地独立

—チュニジアとモロッコの事例から—

池田 亮（国際政治経済論講座准教授）

第二次世界大戦直後、フランスが各植民地の将来的な独立はおろか、自治体制すら認めない姿勢だったことはあまり知られていません。フランスは当時、文化的な意味で植民地の人々をフランス人化するという本来の意味での同化主義はすでに断念していたものの、植民地を共和国に編入する計画でした。いわば、行政面での同化主義を継続していたのだと言えます。ところが、アフリカの年とである 1960 年には旧仏領植民地が一斉に独立を果たします。この大変化はなぜ起きたのでしょうか。

私はこの大転換が起きた理由は、北アフリカの保護国であったチュニジアとモロッコ情勢によるものと議論します。両国は 1956 年に独立を果たしており、実は戦後に植民地宗主国が戦争を経ずに独立を承認した初めてのケースでした。イギリスの方が植民地への権限移譲に積極的だったことを考えると、この逆説はなぜ生じたのでしょうか。以下で両国の情勢に沿って説明します。

1949 年に国連がリビアに 2 年以内の独立を勧告したことから、ブルギバを中心にチュニジアで独立運動が高揚します。しかしフランスは要求を拒絶し続けます。1952 年を通して問題は国連で討議されますが、総会の決議は、両者が国内自治に向けて交渉を続けるべきだと勧告しました。確かにこの決議はフランスの植民地政策の根幹を否定するものでした。



ハビブ・ブルギバ

https://en.wikipedia.org/wiki/Habib_Bourguiba#/media/File:Bourguiba_Bizerte.jpg

他方モロッコでも、スルタン・モハメド五世を中心に独立運動が高揚していました。しかし彼の独立運動に、豪族であるエル・グラウイは反発します。彼はモハメドの近代化政策に反感を持っており、また自身の地位をフランスが保証していたことから、独立にも反対します。この結果、

彼を中心に反モハメド五世の動きが活発化し、1953 年 8 月には私兵を率いてモハメド廃位を要求する運動を始めました。フランスはモハメド廃位を余儀なくされ、厳しい国際批判を浴びました。



スルタン・モハメド五世

https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:Mohammed_V_of_Morocco#/media/File:Mohammed_V_of_Morocco.jpg

チュニジアでは、国王であるベイがフランスの要求に応じて 1954 年 3 月に国会開設を承認しました。この国会はフランス・チュニジア人議員の両院から成り、最終的には前者が優位になるように設計されていました。フランスはチュニジア人政治共同体を否定したのです。これに対し、ブルギバが反ベイ宣伝を開始します。ナショナリズムの大義をベイが裏切ったことを非難し、「すべての政治権力はベイではなく人民に由来する」ことを強調するもので、ベイの権威に対する挑戦でした。この結果、チュニジア国内で武力蜂起も発生し、かつベイが人民の信認を失った今、行政が麻痺するという異常事態が発生したのです。

このことがフランス側の大転換を招きます。同年 7 月末にマンデス＝フランス首相はチュニジア人の主権と国内自治を承認しました。もはやベイを協力者とする支配が不可能だと悟ったフランスは、ナショナリストを協力者として選んだわけです。自治を認めないという旧来の植民地政策の大転換でしたが、逆にこれにより、チュニジアでの影響力温存に成功しました。

次いでフランス政府はモロッコでも同様の政策転換が有益だと考えました。しかし、封建豪族が強い勢力を持つモロッコではナショナリストに頼る政治体制樹立は非現実的でした。この結果、豪族など勢力も含む准自治体制設立が計画されます。しかしその矢先、1955 年 10 月に再度フランスは大転換を迫られました。ソ連がエジプトの大規模軍拡に協力を開始したことを意味する武器取引が公表されたからです。このため、中立主義的、つまりフランスに頼らずに国家建設を進める勢力が急拡大します。これはエル・グラウイから豪族にとって死活問題であり、モロッコは内戦寸前の状況に陥りました。この結果、フランスはモハメドの復位を承認します。彼のみがナショナリストの支持を獲得し、豪族の忠誠心を維持できる存在だったため、内戦から国を救えると考えたわけです。同時にフランスは、彼の権威の確立には独立承認が不可欠だと理解していま

した。モロッコは、チュニジアより政治発展が遅れていたにもかかわらず、先に独立を獲得したのです。

続いて、チュニジア人の不満を宥めるため、フランス政府は同国の独立も承認する必要があると判断しました。フランスと両国間の独立交渉は 1956 年 2 月に開始され、3 月には両国独立の原則が公式に承認されました。

両国の独立達成は、世界政治に大きな影響を及ぼします。第一に、フランスは行政面での同化政策を断念し、植民地独立を承認していきます。現在、主権国家は世界中に存在していますが、二国の独立はその大きな原因となりました。第二に、それにもかかわらずフランスと旧植民地の政治的紐帯は強いままです。冷戦期、アメリカはフランスと旧植民地の政治的つながりを、経済援助によって下支えするという戦略を採用します。このことは政治的混乱を招かず、ソ連の影響力拡大を防ぐという、冷戦戦略にも適合的だったのです。

国際文化研究科主催行事の報告

第 1 回 G2SD-SDGs 国際シンポジウム開催報告

池田 亮（国際政治経済論講座准教授）

2019 年 12 月 13 日（金）に、マルチメディア棟 6 階において、本研究科主催で「日本とグローバル・ガバナンス」と題して第 1 回 G2SD-SDGs 国際シンポジウムを開催した。2019 年度に開始した Graduate Program in Global Governance and Sustainable Development（グローバル・ガバナンスと持続可能な開発コース、略称 G2SD）の認知度を高める取り組みの一環として、かつ SDGs 学の構築する際の知見を得ることが、開催の目的である。イギリスと韓国より、日本と国際関係に関する専門家を招き、グローバル・ガバナンスと日本の関わりについて講演していただき、SDGs を含めて多くの国際的課題に日本がいかに関与すべきかを検討した。続けて翌 14 日（土）に、学生による報告会を開催し、上記の講師お二人からコメントをいただいた。なお、これらはともに東北大学 災害科学・安全学 国際共同大学院に共催のご協力をいただいた。

1 人目の後援者として、ヒューゴ・ドブソン教授（シェフィールド大学、東アジア研究所前所長）より、「グローバルガバナンス、G の喧騒と日本」と題してお話しいただいた。なお、グレゴリー・トレンチャー准教授（東北大学大学院環境科学研究科）が通訳を担当された。この講演では、2008 年の金融危機以来、G20 が旧来の G7 に代わり、より正統なグループとしてグローバル・ガバナンスを担うと予測されてきたことを指摘した。しかしドブソン教授によれば、依然として G7 が果たしている役割も大きく、この「G の喧騒」ともいえるべき状況において日本は独自の立場を表明すべく G7 をも利用していることを指摘した。



次に、金映根教授（高麗大学グローバル日本研究院）が、「日韓『SDGs（持続可能な）和解学』を始めよう」と題してお話くださった。金教授は世界的に新しい「和解学」の創設を説かれたが、そのためには日韓関係の現況及び相互認識の分析を通じて、両国間の紛争とその原因を究明するため、和解学の類型と実践の要素を点検する必要がある。例えば、日韓国際協力案の一つとして、超国家的災害と安全問題に関するグローバルな対応体制として、人災を管理できる人材が必要である。和解学および危機管理を通じて、葛藤を越え和解に至る道、日韓関係の改善に向けた科学技術・人文・社会の融合的観点からの提言を目指すべきだ、というのが講演の要旨である。最終的に金教授が強調されたのは、人類共通の課題解決において最も重要なのは人間本位のスタンスであり、そのためには、単なるスマート（smart）さだけのを身につけた人材あるいはモノ・サービスより人性（humanity）を加えた「ヒューマート（humanity+smart）・パワー」に注目すべきだ、ということであった。このようにして、グローバル時代における日韓間の災害ガバナンスを構築すべきだとの議論である。



これに対してフロアから、今後の G7・G20 体制がどのようになるのか、あるいは、南アフリカ共和国を除きアフリカのようにいずれにも代表を送っていない地域はどのようにグローバル・ガバナンス体制に参加できるのか、そしてヒューマート・パワーの具体的な中身について質問があり、活発な議論が展開された。

翌 14 日は、王燦堯氏（国際文化研究科博士課程）と Seohhee Ashley Park 氏（同）の二人が発表を行った。それぞれのタイトルは 'Scenario Analysis on the

Generation of End-of-Life Hybrid Vehicles in Developing Countries: Focusing on the Exported Secondhand Hybrid Vehicle from Japan to Mongolia' と 'The Techno-nationalism in Northeast Asia: The Case Study of the Semiconductor Industry' である。王氏の発表は、モンゴルでは多くのハイブリッド車が日本から輸入されていることを前提に、廃車リサイクル（ELV）システム構築のためにモンゴルと日本の政府間協力が必要であること、ハイブリッド車の販売拡大は特定の金属需要を拡大するため、日本は世界的な ELV リサイクル・システム構築を目指すべきだとの議論であった。Park 氏は、日中韓における半導体産業の現状をテクノ・グローバリズムと見るかテクノ・ナショナリズムと見るかという問題を議論した。前者によれば各国が得意分野を中心としてグローバル・バリュー・チェーンと呼ばれる分業体制を敷いているという結論になり、後者によれば各国はそれぞれが同じ分野で気合い合うというナショナリズムの競合が存在することになる。これに対してドブソン教授と金教授より、「なぜモンゴルに注目するのか」あるいは「かつては東アジアには分業体制が存在したが、近年のナショナリズムの台頭によりそれが崩れてきていると見るべきではないか」といった質問がなされた。



今回のシンポジウムの目的は、SDGs をグローバル・ガバナンスの観点から分析することで、SDGs 学創設に向けた第一歩とすることであった。そのためには共同体での価値観の共有や、国家間の協力と同時に産業・市民レベルでの協力が不可欠であることが明らかになった。今後とも、G2SD プログラムを通じて SDGs 学創設に向け努力を続けていきたいと考える。

国際文化研究科・国際日本学の2019年度報告

クリントン・ゴダール（国際日本研究講座准教授）

オリオン・クラウタウ（同講座准教授）

国際日本研究講座の「近代日本ゼミ」を軸とする研究科の日本学事業は、今年度も非常に充実したものとなりました。国外の大学に所属する教員による招待講演10回以上、そして国際集会への参加および開催の他、大学院生の受賞や文学研究科の現代日本学研究室と共同での「日本学研究会」の発足までありました。下記は研究科が開催した一部の招待講演を中心に、今年度の事業を紹介します。



講座主催の招待講演

日本国外の研究者を中心とするものは、次のような企画がありました。まず2019年5月13日に、ペンシルベニア大学助教授のJolyon B. Thomas先生（プリンストン大学宗教学科出身）がこちら東北大学でご講演されました。先生は数ヶ月前に発表された自著『Faking Liberties: Religious Freedom in American-Occupied Japan』の内容を紹介しつつ、近年の宗教論研究との関係で、近代日本における「信教の自由」という概念の生成と定着をめぐるたいへん有意義な課題について話されました。

その数週間後の5月24日に、John Person先生（ニューヨーク州立大学オールバニ校助教授）がまた、興味深いご講演をされました。先生は原理日本社の事例を踏まえつつ、1930年代から40年代にかけての特別高等警察が創造（想像）したものとしての「右翼」概念の歴史的形成を語られました。先生の近著『Arbiters of Patriotism: Right-wing Scholars in Imperial Japan』も楽しみにしております！

6月13日には、Max Ward先生（ミドルベリー大学准教授）がご講演され、新著『Thought Crime: Ideology and State Power in Interwar Japan』の内容も紹介してくださいました。ワード先生は、1930年代を考える際のキーワードとなる「転向」および「国体」という二つのタームに焦点を当て、それらが1920年代からどのような変遷を遂

げていったのか、詳しく説明されました。この時代の思想史研究者が分析用語としてもよく使う言葉ではありますが、ワード先生のご講演はそれらの「歴史性」を再確認させてくれるものでした。



前期の最後に、Adam Lyons先生（京都アメリカ大学コンソーシアム博士研究員）がこちら東北大学の国際日本研究講座で、日本における「教誨師」をめぐるたいへん興味深い講演をしてくださいました（その際、教誨師をつとめておられる方お二人にもお越し頂けました！）ライオンズ先生の歴史研究や理論枠はもちろんのことですが、人間としての教誨師の実際問題への視座にも感銘を受けました。



少し空きましたが、後期もまた、充実した講演が次々と行われました。2019年11月20日（水）に、Emily Anderson先生（全米日系人博物館）による講演「日本帝国を神の国に——20世紀初期のキリスト教徒と帝国主義」を開催いたしました。講演は本研究科の国際日本研究講座に加え、文学研究科日本思想史研究室および東北韓国学フォーラムの合同企画で、片岡龍先生を司会として、京都大学の小倉紀蔵先生の集中講義の一環として開催されました。20世紀前半における日本のキリスト者の大陸での活動について多くの業績を出してきたアンダーソン先生は、報告後、小倉先生のご指摘のみならず、多くの学生の質問に答えて、盛会でした。

2019年12月11日、タイのマハーチュラロンコーンラージャヴィドゥヤ大学（MCU）のSanu Mahatthanadull先生が、本講座を訪問され、講演してくださいました。仏教と科学との関係を専門とされており、現在、MCUのInternational Buddhist Studies Collegeのvice-directorであるMahatthanadull先生はゼミの院生・教員に向けて、講演「Theravada Buddhist Practice and the Access of Happiness」を行いました。テーラワダ仏教における「happiness」の多義性（pāmojja, pīti, passaddhi, sukha,

samādhi など)を踏まえ、「Dhammasamādhi」の問題を詳しく取り上げられました。

そのたった2日後の2019年12月13日、今度は九州大学人文科学研究院のEllen Van Goethem先生がこちらでご講演なさいました。欧米では日本古代史第一人者の一人で、長岡京および桓武天皇について貴重な成果を発表してきたヴァン＝フーテム先生には今回、近代における平安神



宮の形成について、話して頂きました。平安遷都1100年の記念事業の一環として、日清戦争の時期に創祀されたこの神社は、以降も公共空間として京都の近現代史において重要な役割を果たし、今は「日本」のひとつの象徴として、国際的に機能しています。普段、仏教史に没頭するゼミ生は、神道史の話もヴァン＝フーテム先生のような専門家から聴けて、とても贅沢な時間でした。

そして今年度の最後の企画として、2020年1月31日に国際日本文化研究センターのJohn Breen先生のご講演も



ありました。世界レベルで考えても、近現代の神社・皇室研究の第一人者であるグリーン先生は今回、モダン・ヒストリーとしての「皇位継承儀礼」についてお話しされました。事件としての「生前退位」放送から始め、明治・大正期の継承儀礼の背景を詳細に述べた上でまた令和の現在に戻り、「祭政一致」の「過去」と「現在」を感じさせる、非常にためになる講演をなさいました。

大学院生の受賞歴

開催イベントは様々でしたが、教育面でも充実した一年となりました。大学院生はインドネシア、イタリア、台湾などで開かれた国際集会で報告し、国内のシンポジウムなどでご自身の研究を紹介すべく招待される院生も複数名

いました。しかし中でも、大学院生の研究は、学内外の賞の対象となったことは、特に嬉しかったです。日本学術振興会特別研究員(DC1)の亀山光明氏の修士論文は「第5回中村元東洋思想文化賞」の対象となり、高く評価され、



なんと伝統のある出版社・法蔵館から単著として刊行されることになりました！そして同じく特別研究員(DC1)に採用された呉佩遥氏は、2019年12月15日に行った国際カンファレンスでの報告に対して、東北大学国際共同大学院が与える「Hasekura Award」(支倉賞)をめでたく受賞しました。一年間、お疲れ様です。

「アルムニひろば」同窓生のコラム

ロイケオ・スィリアチャー

(言語科学研究講座博士後期課程修了)

平成31年3月に言語科学研究講座を修了したロイケオ・スィリアチャーと申します。国際文化研究科には研究生のときから修士課程、博士課程を修了するまで6年間在学しましたが、今となっては長いようで短い歳月でした。先生方の熱いご指導、先輩方の頼りになる背中、優しいスタッフの皆さんのサポートなど国際文化研究科との思い出は山ほどありますが、本稿では皆様が共感できる東北地方の季節行事の「芋煮会」について書きたいと思います。

6年間仙台にいたので、「芋煮会」は何回も参加しました。しかし、一番印象に残ったのは幹事として参加したときでした。昔の講座ではM2が季節の行事を担当するという決まりがありました。当時のM2は全員留学生でした。会場は恒例の広瀬川河川敷の牛越橋周辺で、やさしい先輩にお願いして朝から場所取りをしてもらいました。芋煮の材料、鍋、炭、飲み物など重いものを運ばないといけない場合、牛越橋は川内キャンパスからそれほど近いわけでもありませんが、皆で雑談しながら歩けば、重いと感じず、あつと言う間に会場に着きました。芋煮を作るには、一番手間がかかるのは火起こしでした。同級生の中で火起こしが得意な人がおり、前の年よりも早く火起こしができました。次はただお湯を沸かして山形風(牛肉で醤油味)と仙台風(豚肉で味噌味)のそれぞれの材料を入れるだけだと思って、味づけして、皆で勢いで具材を入れました。これで完璧だと思いきや、みそ味に牛肉、しょうゆ味に豚肉という風にスープと具材を間違ってしまったことが先生のご指摘で分かりました。失敗しましたが、それも一つの勉強なのでそれはそれで良かったと思います。その後、皆で

ハイブリッド芋煮を食べながら、先生方は歌を披露し、留学生も自分の国を歌いました。私はもう一人のタイ出身の留学生とタイの踊りと歌を紹介し、皆で踊りました。最初は恥ずかしかったのですが、皆でやると楽しかったです。

現在タイで日本語をタイの大学生に教える傍ら、タイ滞在日本人にタイ語を教えています。語学を教えるのは言葉だけではなく、その国の文化や考え方についても教えることも必要であると実感しました。留学というのは専門知識はもちろんですが、その国の文化や習慣を身につけることも大事だと思います。少なくとも東北ならではの行事「芋煮会」に参加するようにと後輩たちにメッセージを送りたいです。これから、同じくタイ出身の修了生と一緒にタイでの同窓生のネットワークの連絡係として頑張りたいと思います。

サリンラット・カウィーチャールモンコン

(言語科学研究講座博士後期課程修了)

2019年3月に言語科学研究講座博士後期課程を修了したサリンラット・カウィーチャールモンコンと申します。2014年4月に言語文化交流論講座博士前期課程に入学し、2016年3月に修了した後、同年4月に博士後期課程に進学しました。東北大学国際文化研究科を選んだのは、教育面や国際交流面など、国際文化研究科でしか得られないことを学ぶことが可能であり、勉強したい分野や講座の科目に興味があったからです。

言語科学研究講座では、認知言語学・対照言語学・社会言語学・語用論などの言語学の専門家である先生方が所属されており、自分の研究に役立つ様々な科目が勉強できました。留学前に日本語講師として働いていたため、日本語と母国語であるタイ語の対照研究をすれば、帰国後の研究と教育の両面において貢献できるのではないかと思います。対照研究を行うことにしました。講座の先生方には、言語学の様々な分野からのご意見やご指導を賜り、大変勉強になりました。また、国際文化研究科では、日本語と中国語や英語などの他言語との対照研究を行っている留学生と対照研究に関する知識や意見を交換することができました。博士後期課程に進学した後、博士前期課程で得た基本的な知識や研究経験を生かし、認知言語学的対照研究を始めました。中国や韓国など様々な国からの留学生と情報や意見を交換することにより、自分と異なる言語文化、生活文化、考え方などを学べたことは、非常に有意義であり研究の助けとなりました。

現在、母国であるタイで日本語講師として働きながら、認知言語学的対照研究も行っています。授業で日本語を説明する際に、これまで学んだ知識や自分の研究の一部を取り上げてタイ人日本語学習者に説明するなど、言語科学研究講座で得た知識や研究経験は教育現場で活かされていると実感しています。研究においても、認知言語学的対照研究を続けているため、留学生同士で行った意見交換から学んだことを生かし、研究を進めています。

上述のように、東北大学国際文化研究科言語科学研究講座は、特に言語学的研究や対照研究を希望する人にとって素晴らしい環境だと思います。これまで、東北大学国際文

化研究科は、言語学を専門に学ぶタイ人日本語学習者の中であまり知名度が高くないせいか、留学先に選ぶ人が少なかったように感じます。現在、タイに戻り、同じく修了生であるロイケオさんとともに、国際文化研究科言語科学研究講座をタイ人日本語学習者に紹介し、今後のタイにおける東北大学国際文化研究科の同窓生のネットワークを広めるべく努めていきたいと思っています。



サリンラットさん(左)とロイケオさん(右)

事務局より

①「アルムニひろば」について

14号から新たに同窓生のコラム「アルムニひろば」を設けました。「アルムニ alumni」は同窓生を意味するラテン語です。このページでは、修了後の同窓生の活動を紹介してゆきます。投稿も歓迎いたします。

②同窓会メールマガジンについて

事務局では会員の皆さまに興味をもっていただける情報を随時お届けしたいと思います。また、会員の皆さまからもメールマガジンに掲載してほしい情報などをお寄せください。

③メールアドレスについて

メールアドレスを変更された方や未登録の方は次のアドレスにご連絡をお願いします。メールアドレスは厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

国際文化研究科同窓会

<int-dosokai@grp.tohoku.ac.jp>

④同窓会ホームページ

これまでの総会、理事会、会報、その他の資料を掲載していますのでご覧ください。

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/alumni/>

⑤同窓会懇親会について

事務局では今後とも会員の要望に基づき懇親会を開催したいと考えていますので開催希望などお寄せください。

⑥ご意見・ご提案等を！

同窓会についてのご意見・ご提案等がございましたら事務局までお知らせください。宛先は本会報の題字欄に示してあります。また、ご住所・勤務先・メールアドレス等に変更がございましたらご連絡願いま

す。お寄せいただいた個人情報は厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

⑦会費・寄付金の納入のお願い

会則第11条第1項及び12条に基づき会員の皆様に会費等の納入をお願いいたします。

○入学、進学及び編入学者で未納の方

(1) 国際文化研究科前期課程の学生：4,000円

(2) 国際文化研究科後期課程の学生：

編入学者：5,000円 進学者：3,000円

(令和2年3月現在)

○上記以外の方(修了生、在学生、現教職員・元教職員等)にはご寄付という形のご支援をお願いできますと幸いです。

○会費・寄付金とも、郵便局からお振り込みいただくか、国際文化研究科教務係窓口にご納めください。

郵便振替口座名称：国際文化研究科同窓会

郵便振替口座番号：02220-5-6662

